

## チャンキャ『宗義書』「毘婆沙師」章 教説個所の訳注研究 (3)

木村 誠 司

### I

今回、本稿では蘊・界・処の解説個所を扱う。これまで、出来る限り、現代語訳を心掛けてきたが、キーとなる蘊・界・処に対する現代語は、残念ながら、思いつかなかった。実は、大分以前に、櫻部健氏が、蘊を「群」、界を「類」、処を「門」と訳したことがある<sup>1)</sup>。それを踏襲することも考えたのだけれど、いまひとつピンと来ないので、止めにした。櫻部氏は、深い学識の下で、訳語を工夫されたのだろう。しかし、筆者はチャンキャ (ICang skya, 1717-86) の解説を辿ることに精一杯で、自分は何も知らないのだということを始終痛感させられたのだから、満足のいく現代語訳等思い浮かぶはずもないのだ。

内容理解についても、正直なところ、世親 (Vasubandhu) の『俱舍論』 *Abhidharmakośabhāṣya* を押さえていれば、何とかなるだろう位に思っていた。確かに、『俱舍論』の引用は多い。とはいえ、チャンキャは『俱舍論』の祖述で済ませることなく、かなり自由に論じているようだった。気付いた範囲でも、さりげなく『俱舍論』のインド撰述注等を織り交ぜている場合もある。他の毘婆沙師 (Bye brag tu smra ba, Vaibhāṣika) 文献を踏まえているのではないかと推測出来る個所もあった。それどころか、中観派 (dBu ma pa, Mādhyamika) のチャンドラキールティ (Candrakīrti) 作とされる『中観五蘊論』 *Madhyamakapañcaskandhaka*<sup>2)</sup> の影さえちらついた。だが、筆者の学力では、確実なことはわからないままで済ませるしかなかった。さらに、毘婆沙師説を解説するだけに留まらず、自説を披瀝する個所もあり、理解の及ばないことも多々あった<sup>3)</sup>。例えば、「認識不可の物質 [= 無表色] について、合理的な物質であると認める自派は、毘婆沙師と帰謬派2つと確定しているのである」という一節は、見過ごせなかった。前に読んだ限りでは、チャンキャは中観帰謬

派 (dBu ma thal gyur pa, Prāsaṅgika- Madhyamaka) の立場から、毘婆沙師を口を極めて批判していたからである<sup>4)</sup>。毘婆沙師とは不俱戴天の間柄のはずなのに、この発言をするとは、一体何を意図しているのだろうか？チベットでの毘婆沙師解釈そして中観帰謬派との関り方を深く知らなければ、不十分であることは察しがつく。しかし筆者にはその術がない。溜息をつく外はないのである。また、蘊・界・処につきものの、味や形状のこと等も、すぐわかるものだろうとたかをくくっていたのであるが、予想外に難題であった。

あれやこれやで、満足のいく訳注が出来たのか、はなはだ、心許ない。ともあれ、以下に、拙訳と注を示し、末尾に、原文のローマ字転写を付すことにした<sup>5)</sup>。ひたすらに、博雅の是正を待つ次第である。

## 注

- 1) 桜部健「存在の分析」『世界の名著 2 大乘仏典』所収、昭和42年 pp.329-396、特に p.336。
- 2) この書については、後の注で触れる。
- 3) 拙稿「チャンキヤ『宗義書』『毘婆沙師』章教説個所の訳注研究 (2)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』80、令和4年では、二諦を扱ったが、その末尾の記述は謎のままである (p.196の注12) 参照)。今回の蘊・界・処についても、疑問を残したまま、訳を進めた。学的な誠実さを欠いていると認めなければならない。訳す途上で気づかされたこともある。蘊・界・処の直前では、アビダルマの二諦説が論じられている。この配列も、チャンキヤの意図を反映しているのではないだろうか？二諦説では、分析可能なものの存在性は否定される。それを考慮すれば、蘊・界・処の仮実論争が当然頭に浮かぶはずなのに、チャンキヤは何も語らない。しかし、論題の配列を考えるならば、仮実論争は視野に入らずにはいられないのである。筆者は、ここにチャンキヤの一筋縄ではいかない論述を見るのだが、少々、穿ち過ぎなのかもしれない。仮実論争に関しては、加藤純章『経量部の研究』平成元年、pp. 173 - 183 参照。
- 4) 拙稿「チャンキヤ『宗義書』『毘婆沙師』章教説個所の訳注研究 (1)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』79、令和3年、p.160とその注参照。
- 5) 底本として、*Buddhist Philosophical Systems* ed. by L. Chandra, New Delhi, 1977 (Śāta-Piṭaka Series, vol.233) を使用した。なお、チャンキヤ『宗義書』『毘婆沙師』章を俯瞰する論文に、池田練太郎「ICaṅ skya 宗義書における Vaibhāṣika 章について」『日本西蔵学会々報』25、昭和54年、pp.1-4がある。また、チャンキヤと同派の先達、ゲドゥンドゥブ・ダライラマ1世 (dGe 'dun grub, 1391-1474) の『俱舎論』注の全訳が刊行されている。現銀谷史明、ガワン・ウースン・ゴンタ『全訳 ダライ・ラマ1世 俱舎論註『解脱道解明』』平成29年。チベットに関わるものとしては、現銀谷史明「蘊・界・処についてーコラムバ著『全所知の開門』構成を通してー」『印度学仏教学研究』57-1、平成20年、pp.456-252を挙げておく。

## II 訳注

第2蘊(phung, skandha)・界(khams, dhātu)・処(skye mched, āyatana)という項目(rnam bzhag)<sup>1)</sup>について、蘊・界・処3つ<sup>2)</sup>を説く必要性とは、『俱舍論』〔第1章「界品」dhātu-nirdeśa, 第20偈〕において、「愚かさ(rmong, moha)と、能力(dbang, indriya)と、欲求('dod, ruci)に〔それぞれ〕3つがある故に」<sup>3)</sup>と言うごとく、3つの愚かさが退くこと、能力の優れた者(rno)・中〔位の者〕('bring)・鈍い者(rtul)3者を利すること、言葉の使用(tshig gi spros pa)が詳細(rgyas)・中〔位〕('bring)・簡略(bsdus)3つを欲求する者を利することのためなのである。

後者2つ〔能力と欲求〕はわかりやすいが、愚かさの止息方は、〔注意を要する〕。心作用(sems byung, caitta, 心所)に対して、統括体があると執着する(ril por 'dzin pa, piṇḍagrahaṇa, 総執)愚かさが止息するために五蘊を、そして物質(gzugs, rūpa, 色)に対して、統括体があると執着する愚かさが止息するために12処を、さらに物質と精神(sems, citta, 心)の両者に対して、統括体があると執着する愚かさが止息するために18界を説いたのである<sup>4)</sup>。

五蘊の順序は、同書(de nyid)〔=『俱舍論』第1章「界品」第22偈〕において、「順序は、粗さと苦惱(kun nyon mongs, saṃkleśa, 雑染)と器等の物と界に従う」<sup>5)</sup>と言われるように、粗細(rags phra)の順序、苦惱が生じる順序、食べ物(zas)を享受する(longs spyod pa)順序、三界における行為の在り方(spyod tshul)の順序に対応している(mthun pa)のである<sup>6)</sup>。界と処の順序は、対象を有するもの(yul can, viṣayin, 有境)の処と界の順序は決まっています、それに対応して(mthun par)、対象(yul, viṣaya)の処と界の順序は、説明される。〔これに関しては〕細かなことには広げないのである。

語釈(sgra bshad)は、同書〔第1章「界品」第20偈〕において、「集積・生門・種類の意味である」<sup>7)</sup>と言われるように、多くのものが1つに集積するので蘊なのである。生ずる門となるので処なのである。その存在(chos, dharma)の種類なので界なのである。分類に関しては、五蘊のうち物質(色)は、眼・耳・鼻・舌・身という5感官(dbang, indriya)と、色形・音・香・味・触感、即ち5つの対象(don, artha)と、認識不可の物質(rnam par rig byed ma yin pa'i gzugs, avijñapti-rūpa, 無表色)<sup>8)</sup>計(te)11である。そのうち、物質の処において、色彩(kha dog, varṇa)物質12と、形状(dbyibs, saṃsthāna)物質8、計20〔が

ある] である。色彩は、青・黄・白・赤の4つと、雲 (sprin)・煙 (du ba)・埃 (rdul)・霧 (khug rna)・影 (grib ma)・光 (nyi ma)・明かり (snang ba)・闇 (mun pa) 等である。形状は、長 (ring po)・短 (thung ngu)・四角 (lham pa, vṛtta、方)・丸 (zlum po, parimaṇḍala、円)<sup>9)</sup>・高 (mtho ba, unnata)<sup>10)</sup>・低 (dma' ba, avanata)<sup>11)</sup>・平ら (phyā le ba, sāta)・デコボコ (phyā le ba ma yin pa, visāta)<sup>12)</sup> 等である。

音の処には、意識者 (zin pa, upātta、有執受)<sup>13)</sup> の元素 ('byung ba chen po, mahābhūta、大種) を原因とする音と、無意識者の元素を原因とする音の2つがある。それはそれぞれに、さらに、有情と示されるものと示されないもの2つづつがあり、それはそれぞれに、さらに、心地よいもの (snyan)<sup>14)</sup> と心地悪しきもの2つづつがあり、計8つなのである。香りには、よい香り (zhim, sugandha) とよくない香 (mi zhim, vigandha) それぞれに、適度なもの (mnyam, sama、平) と過度なもの (mi mnyam, visama、不平)<sup>15)</sup> が2つづつ、計4つがある<sup>16)</sup>。味には、甘味 (mngar ba)、酸味 (skyur ba)、苦味 (kha ba)、渋味 (ska ba)、辛味 (tsha ba)、塩味 (lan tshva ba) 計6つがある<sup>17)</sup>。触感には、地水火風の4つの元素、滑らかさ ('jam pa)、粗さ (rtsub pa)、重さ (lci ba)、軽さ (yang ba)、冷たさ (grang ba)、ひもじさ (bkres pa)、渴き (skom pa) 計11がある<sup>18)</sup>。認識不可の物質には、戒 (sdom pa, saṃvara) と無戒 (sdom pa ma yin pa, asaṃvara) と [どちらでもない] 中間 (bar ma) の物質があつて、3つとして存在するのである<sup>19)</sup>。同書 [『俱舍論』第1章「界品」11偈] において、「[心] 乱れた者 [= 無戒の者] にも無心の者 [戒を持する者] にも」<sup>20)</sup> 等と言われるように、[心] 乱れたり、無心の状態においても元素は、善・不善何れにもある。前後の心の流れ (rgyun) 何れも伴う。4元素を原因とするものなのである。<sup>21)</sup> 認識不可のものは、即ち、5つの特殊性 (khyad par)<sup>22)</sup> を具えてると認められ、認識不可の物質について、合理的 (mtshan nyid pa)<sup>23)</sup> な物質であると認める自派は、毘婆沙師と帰謬派2つと確定しているのである<sup>24)</sup>。感受 (tshor ba, vedanā、受) の蘊に、楽・苦・不楽不苦の3つの感受と、眼が接触して生じる<sup>25)</sup> 感受等6つとして存在するとしても、まとめるならば、身体の感受と心の感受2つにまとめられるのである。想の蘊に、形態 (mtshan ma, nimitta) のみを把握する無分別の想と、喜びに執着する有分別の想2つがある<sup>26)</sup>。行 ('du byed, saṃskāra) の蘊に、相応 (mthungs ldan, samprayukta) 行と不相応行の2つがある。最初のものには、心作用49 (bzhi bcu zhe dgu)<sup>27)</sup> があり、心作用51 (Inga

bcu nga gcig)<sup>28)</sup>のうち、感受と想の2つは入らないのである<sup>29)</sup>。不相応行について、この流派 (lugs) [= 毘婆沙師] に14あり、この2つ<sup>30)</sup>は後に説明するであろう。18界には、眼界等の拠り所 (rten, āsraya) たる界6つ、視覚等の拠り所を持つ (rten pa, āsrita) 界6つ、物質等対象の界6つ、計18がある。処は、眼等対象を持つ処6つ、物質等の対象の処6つなのである。

## 注

- 1) rnam bzhag に対して、「項目」という訳語はふさわしくないのかもしれないが、前の拙稿(「チャンキヤ『宗義書』「毘婆沙師」章教説個所の訳注研究 (1)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第79号、令和3年、pp.160-145)との整合性を取るために選択した。
- 2) 上でも述べたように、訳語は旧来からのものを踏襲した。かつて、櫻部健氏は、蘊を「群」、界を「類」、処を「門」としたことがある(注1-1)参照)。
- 3) 『俱舎論偈』、北京版 No.5590, Gu.3a/3、原文カッコ内 (mongs dbang 'dod rnam gsum gyi phyir) 『俱舎論偈・注』北京版 No.5591, Gu.38b/6、原文カッコ内 (mongs dbang 'dod rnam gsum gyi phyir) ここで偈と注2か所の典拠を示す理由は、注1-3)の拙稿 p.200の注4)で示したように、ツルティム・ケサン氏の論文を受けてのことである。同氏は、偈と散文注の思想内容を区別するチベットの伝統を伝える。また、最近、偈と散文注の作者を別人とする研究も提出された。H. Buescher; Distinguishing the Two Vasubandhu, the Bhāṣyakāra and the Kośakāra, as Yogācāra-Vijñānāvāda Authors, in *The Foundation for Yoga Practitioners The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet* ed. by U. T. Kragh, 2013, Cambridge, Massachusetts and London, pp.368-369. ビュッシャー氏は、ツルティム・ケサン氏の研究には触れていない。また、偈と散文注の区別を指摘する、加藤純章氏の研究にも言及していない(加藤純章『経量部の研究』pp.32-36)。さて、偈と注は同文であるが、チャンキヤの引用とは太字の部分異なる。チャンキヤは rnam を rnam (複数を示す語) としている。

サンスクリット原文は、mohendriyarucitraidhāt (P:p.14, l.10, S:p.50, l.6, E:p.22, l.13) である。これに従えば、rnam とするのが適切であろう。なお、『俱舎論』の偈を再考する論文がある。田中裕成「俱舎論頌伝説句の改変」『印度学仏教学研究』70-2、令和4年、pp.985-980。チャンキヤが見ていた『俱舎論』がどのようなものか知る術はないが、現行のものとは異なるからといって、単純に否定すべき理由もないのである。

- 4) チャンキヤは明言していないが、「愚かさの止息法」の解説は、ヤショーミトラ (Yaśomitra) 注『明瞭義』(sphuṭārthā) を踏まえ、簡略化したものであろう。『明瞭義』の文は、相当長いものだが、証拠のため以下に原文を示しておこう。

de'i phyir ril po'i bdag tu 'dzin pas zhes bya bas ni/kha cig ni sems las byung ba rnam la ril por gzung nas de dag nyid la bdag tu 'dzin te/ril por gzung na bdag tu 'dzin pa 'jug pa'i phyir ro//de dag la ni phung po bstan te/de la ni tshor ba dang//du shes dang//du byed kyi bye brag gis sems las byung ba rnam pa gsum du bstan te//di la 'di ni ril po gcig pu ma yin gi sems las byung ba'i khyad par yin no zhes bdag tu 'dzin pa'i gnyen por byas pa yin no//rnam pa gcig tu na kha cig bdag gi dngos po 'di ni ril po'i ngo bo yin la bdag de tshor ba dang//du shes pa bo dang sems pa bo yin no snyam du kun tu rmongs so// de dag la phung po bstan te//di ni bdag gi ngo bo gong

bu ma yin gyi 'di la 'di dag ni sems las byung ba rnams yin te/tshor ba dang/'du shes dang/'du byed dag 'jug pa yin no zhes bdag tu 'dzin pa'i gnyen por byas pa yin no// kha cig ni gzugs kho na la 'o zhes bya ba ni ril po 'dzin pas kun tu rmongs so zhes bya bar skabs dang sbyor ro//de dag la ni skye mched bstan te/de la ni gzugs ni mig la sogs pa'i bye brag gis rnam pa mang por rnam pa phye'i sems las byung ba rnams ni chos kyi skye mched gcig kho nar bstan la/sems kyiir (read. kyi) yid kyi skye mched nyid du bstan to//kha cig ni gzugs dang sems dag la 'o zhes bya ba ni ril por 'dzin pas kun tu rmongs so//zhes bya ba kho nar skabs dang sbyar ro//de dag la ni khams bstan te/de la ni gzugs kyang mig la sogs pa'i bye brag gis mang por rnam par phye la sems kyang mig gi rnam par shes pa la sogs pa'i khams kyi bye brag gis mang por rnam par phye 'o/sems las byung ba rnams ni ma yin te/chos kyi khams nyid kho nar bstan pa'i phyir ro//des ni gzugs dang sems la ril por 'dzin pa'i gnyen por bas (read. byas) pa yin no// (北京版、No.5593, Cu,49b/8-50a/8)

サンスクリット原典

*piṇḍ'ātma-grahaṇata* iti, *kecic caittān* piṇḍato grhītvā tān ev' ātmato grhṇanti, piṇḍa-grāhe saty ātma-grāha-pravṛttech, teṣāṃ *skandha-deśanā*, tasyāṃ hi vedanā-saṃjñā-saṃskāra-bhedena tri-dhā caittā deśitāḥ, nāyam ekaḥ piṇḍas caitta-viśeṣā ihēty ātma-grāhaḥ, pratipakṣito bhavati, atha vā piṇḍa-rūpo 'yam ātma-bhāvaḥ, sa c'ātmā vedayitā saṃjñātā cetayitēti kecic saṃmūdhāḥ, teṣāṃ skandha-deśanā, nāyam ātma-rūpaḥ piṇḍas caittā ihēme vedanā-saṃjñā-saṃskārāḥ pravartante ity ātma-grāhaḥ pratipakṣito bhavati, *kecid rūpa evēti* piṇḍ'ātma-grahaṇataḥ saṃmūdhā ity adhikṛtaṃ, teṣāṃ *āyatana-deśanā*, tasyāṃ hi rūpaṃ cakṣur-ādi-bhedena bahudhā vibhaktaṃ, caittās tv aikadhyam eva dharm'āyatanatvena cittaṃ ca mana-āyatanatvenēti, *kecid rūpa-cittayor* iti, saṃmūdhāḥ piṇḍ' ātma-grahaṇata ity adhikṛtaṃ eva, teṣāṃ *dhātu-deśanā*, tasyāṃ hi rūpaṃ cakṣur-ādi-bhedena bahudhā vibhaktaṃ, cittaṃ cakṣur-vijñān'ādi-dhātu-bhedena, na tu caittā dharma-dhātutvenaiva deśitatvād iti, tayā rūpa-citta-piṇḍa-grāha-saṃmohaḥ pratipakṣito bhavati, (W:p.47, ll.19-32, S:p.51, ll/11-21)

この個所の和訳に、荻原雲來譯註『稱友俱舍論疏(一)』昭和8年、pp.76-77がある。気になるのは、『俱舍論』自注の'piṇḍātmagrahaṇataḥ, ril po'i bdag nyid du 'dzin pas'を「総じて、我を執るが故なり」と訳すことである。『俱舍論』第1・2章を和訳した、櫻部健氏も同じ個所を「総じて我を固執する点から」(櫻部健『俱舍論の研究【界・根品】2011年、新装版、p.176)と訳す。「総じて」と訳すことが、筆者には疑問である。この個所は「統括体を本質とするのであると執着するので」と訳すべきではないだろうか。しかし、平川彰氏を中心とした、漢訳本では「總じて執シテ我ト爲スト」という読み方を示している(平川彰編 小林圓照・沖本克己・藤田正浩校訂『真諦譯對校 阿毘達磨俱舍論 第一卷』1998年、p.32)。荻原・櫻部両氏もこのように玄奘の漢訳読みに従ったのだろう。なお、参考になる論文に、木村紫「piṇḍa 再考」『印度学仏教学研究』70-2, 令和4年、pp.992-986がある。

- 5) 『俱舍論偈』、北京版 No.5590, Gu.3a/3-4、原文カッコ内 (rim ni rags dang kun nyon mongs//snod **sogs** dang khams ji bzhin no//), 『俱舍論偈・注』北京版 No.5591, Gu 39b/3 原文カッコ内 (rim ni rags dang kun nyon mongs//snod **rtshog** don khams ji bzhin no//) 両訳は太字の個所が異なる。『偈・注』の **rtshogs** は、『藏漢大辞典』(民族出版、1993年)の、**rtshogs pa** の項には「**phel ba**、増長」(p.2230)とあるが、これでは意味が汲みとれない。梵文は *kramaḥ punaḥ/yathaudārikasaṃkleśabhājanādyarthadhātutaḥ//* (P:p.15, ll.8-9, S:p.53,

II-8-9, E.p.23, I.24-p.24, I.1)) であるので、『偈』を是とすべきだろう。チャンキヤの引用は、『偈』に一致する。Eの江島本 p.23 脚注 (11) には、『大毘婆沙論』*Mahāvibhāṣā* と『雜阿毘曇心論』*Kṣudrakābhīdharmahr̥daya* の当該個所が示されている。なお、訳文等は、注 II-4) の櫻部本 p.180 を参照した。

- 6) チャンキヤの解説内容は、注 II-4) の櫻部本 pp.180-181 を参照されたい。
- 7) 『俱舎論偈』、北京版 No.5590, Gu.3a/3、原文カッコ内 (spungs dang skye sgo rigs kyi don//) 『俱舎論偈・注』北京版 No.5591, Gu.37a/8、原文カッコ内 (spungs dang skye sgo rigs kyi don//) 両訳は全く同じで、チャンキヤの引用とも一致する。サンスクリット原文は *rāśyādvāragotrārthāh* (P:p.13, I.4, S:p.46, I.2, E:p.20, I.3) である。注 II-4) の櫻部本 p.172 を参照した。
- 8) *rnam par rig byed ma yin pa* そして対になる *rnam par rig byed pa* は、それぞれ *avijñapti*, *vijñapti* の訳語である。筆者はこの語について語るべき何物もないが、『俱舎論』にも触れ、貴重な指摘をした論文を挙げておきたい。李鐘徹「*vijñapti* の語形について」『印度学仏教学研究』53-1, 2004年、pp.346-341。
- 9) 注 II-4) の櫻部本では、「方・円」に対し、詳細な注を付している。氏は、ヤシヨミトラ『明瞭義』や『俱舎論』の別個所等多岐に渡る文献に触れ、サンスクリット語・チベット語訳・漢訳も視野に入れ考察した。最終的には漢訳に従い、方・円を支持した (pp.155-156 の注 1)。また、櫻部氏は「説一切有部における八種の「形色」と六種の「味」」(櫻部健『増補佛教語の研究』昭和 50 年、pp.78-87) においても、同じ問題を論じている。ちなみに、『蔵漢大辞典』では、*lham pa* は「正方形」*gru bzhi kha gang* (p.3100) で、*zlum po* は「特殊な形状、円かで丸い」*dbyib kyi khyad par gor gor dang ril ril* (p.2485) とされている。チャンキヤの理解はわからないが、彼の『宗義書』がチベット語で書かれていることを勘案し、本稿では『蔵漢大辞典』を参考として、訳して見たが正確さについて自信はない。
- 10) 『俱舎論偈・注』の当該箇所の訳は、*mthon po* (Gu,31b/7) である。また、当然かもしれないのだが、『俱舎論索引』第三部 チベット語 サンスクリット語 対照 (平川彰・平井俊榮・袴谷憲昭・吉津宜英・高橋壮) 1978 年でも、*mthon po* に対し原語 *unnata* が示され、*mtho ba* はない。H. A. Jäschke, *A Tibetan-English Dictionary* では、*mthon po* と *mtho ba* は両者とも *high* の意味があり大差ない。『蔵漢大辞典』でも両語とも「高い」という意味である。
- 11) 注 II-4) の櫻部本は凸・凹と訳す (p.150)。漢訳は高下 (注 II-4) の平川本 p.12。
- 12) 注 II-4) の櫻部本は正・不正と訳し (p.150)、注も付す (p.157 の注 2) 漢訳も同じ (注 4) の平川本 p.12)。『蔵漢大辞典』によれば、*phyale ba* は「面が平らな形状」*ngos mnyam pa' i dbyibs* (p.1731) とあり、*phyale mayin pa* は当然、その反対「面が平らでない形状」*ngos mi mnyams pa' i dbyibs* (p.1732) とある。本稿では、それに従った。
- 13) 注 II-4) の櫻部本では「有知覚的」(p.152) と訳す。本稿の訳語が櫻部氏のものより適切であるのか確信はない。
- 14) 『俱舎論偈・注』では、*yid du 'ong ba* (Gu,32a/6) であり、チャンキヤとは言葉が異なる。
- 15) 適度・過度という訳語は、注 II-4) の櫻部本 (p.153) に従った。
- 16) 『俱舎論偈・注』は、以下の如し。*dri rnam pa dang/dri ng aba rnam pa gnyis/dri mnyam pa dang mi mnyam pa' i phyir ro//* (Gu,32b/2) チャンキヤとは異なる表現だが、両者文意は同じであろう。
- 17) 『俱舎論偈・注』は、以下の如し。  
*ro ni nam pa drug//mngar ba dang//skyr ba dang/lan tshava dang//tsha ba dang/kha ba*

dang/bska ba'i bye brag gis so// (Gu,32b/1-2) やはり、チャンキャとは異なる。

『俱舎論偈・注』を注 II-4) の櫻部本では「甘さ・酸さ・鹹さ・辛さ・渋さ」と訳し、特に「渋さ」に対して注を付す (pp.157-158 の注 5) チャンキャは「渋さ」に相当する *bska ba* ではなく、*ska ba* と表現していると思われる。『藏漢大辞典』の *ska ba* の項 (p.104) には「六味の区別、アルラの味のようなもの」(ro drug gi bye brag a ru ra'i ro lta bu) とある。H. A. Jäschke: *A Tibetan-English Dictionary* には「myrobalan、苦い菓草」とある。よって、本稿では *ska ba* を苦味と訳した。なお、注 II-9) の櫻部本 pp.85-87 でも論じる。

- 18) チャンキャの触感に関する記述は、『俱舎論』を簡略化したものである。注 II-4) の櫻部本 p.153 の訳を参照されたい。
- 19) チャンキャの解説は、『俱舎論』第 4 章業品 (karma-nirdeśa) 13 偈に基づいていると思われる。『俱舎論偈』Gu,11b/4-5 原文カッコ内 (rnam rig min rnam gsum zhes bya//sdom dang sdom pa min dang gzhan//)、『俱舎論偈・注』Gu,202b/6 原文カッコ内 (rnam rig min/de ni rnam gsum zhes bya/sdom dang sdom pa mi (read. min) dang gzhan) 両者は、内容は一致しているが、表現は相違している。『俱舎論偈・注』に乱れを感じるけれど、実際のところは不明である。サンスクリット原文は *avijñaptis tridhā jñeyā saṃvarāsaṃvaretarā* (P.p.205, l.13, Sp.477, l.6)、なお、舟橋一哉『俱舎論の原典解明 業品』昭和 62 年、p.119 に和訳があり、参照した。しかし、ヤシヨームトラのこの個所の注にも、「業品」につながる記述があるので、それに依存したかの生も高い。注釈は非常に長いので、訳文のみ紹介しておこう。注 II-4) の荻原本 pp.48-54 参照。
- 20) 『俱舎論偈』Gu,2b/5 原文 ( ) 内 (gyengs dang semes med pa yi yang//) 『俱舎論偈・注』Gu,33a/6 原文 ( ) 内 (gyengs dang semes med pa yi yang//) 両者は全く同じで、チャンキャとも同文である。サンスクリット原文は *vikṣiptācittakasyāpi* (P.p.8/l.1, Sp.31, l.2, E.p.11, l.10)
- 21) チャンキャの解説は、『俱舎論』の要約である。注 II-4) の櫻部本 pp.154-155 を参照されたい。櫻部氏は「乱れた心」に関して、注記し (pp.158-159 の注 8・9) 伝統説との齟齬についても指摘している。また、その櫻部本 p.158-159 の注 8・9 には、「乱れた心」についての注が付されている。
- 22) 5 つの特殊性の具体的内容ははっきりしないが、注 I-5) の現銀谷史明、ガワン・ウースン・ゴント本、界品 11 偈注の訳で、5 特殊性が述べられている。同本注 51 も参照。
- 23) *mtshan nyid pa* は *lakṣaṇa* (定義) の派生語 *lākṣaṇika* (定義家) の訳語と思われる。『藏漢字大辞典』(p.2305) には、「質量を具えたもの」(*tshad ldan*)、「論勝因に頼り意味を推測する論理道」*gtan tshigs la brten nas don dpog par byed pa'i rigs lam pa* とあった。訳語は「合理的なもの」としたが、「物理的なもの」という選択もあり得るであろう。
- 24) チャンキャの発言真偽・背景について、今の筆者には探る術はない。
- 25) チャンキャの解説は、*mig gi 'dus te reg pa las ba'i tshor*、その根拠『俱舎論偈・注』Gu,35a/8-36a/1 も全く同じである。『俱舎論 第三部』(平川彰・平井俊英・袴谷憲昭・吉津宜英・高橋壮、1978 年、p.132) には、*ḥdus te reg pa las byuñ ba*、*saṃsparśa-ja* とある。これを参考にしても、*'dus te* は *sam* を訳したものと解釈出来る。しかし、動詞として見ることも可能である。その場合、「眼が加わり、接触することから生じた」云々とすることも考え得る。
- 26) チャンキャの解説は、ヤシヨームトラの『明瞭義』に基づいていると思われる。以下に原文を引用して、証拠としよう。

mtshan mar 'dzin pa'i bdag nyid do zhes bya ba la/mtshan ma ni dngos po'i gnas skabs kyi khyad par te sngon po la sogs pa yin no//de 'dzin pa ni yongs su gcod pa 'o//de'i bdag nyid ni de'i ngo bo nyid do//sdug bsngal la sogs pa zhes bya ba'i sgras ni dmar po la sogs pa bsdud ste/'di ni 'du shes kyi phung po yin no//gal te 'du shes yongs su gcod pa'i bdag nyid yin na go de dang mtshungs par ldan na mtshan ma la 'dzin pas rnam par shes pa'i tshogs lnga rnam par rtogs pa can du 'gyur ro zhes na mi 'gyur te/rnam par shes pa lnga dang mtshungs par ldan pa'i 'du shes ni gsal ba yin pas de kho na rnam par rtog pa dang bcas pa yin par bshad do// (Cu,39a/1-4)

サンスクリット原文

*sa vedanā-skandhaḥ, nimittōdgrahaṇ'ātmikēti, nimittaṃ vastuno avasthā-viśeṣo nīlatv'ādi, tasyōdgrahaṇaṃ paricchedaḥ, tad-ātmikā tat-svabhāvā, duḥkh'ādīty ādi-śabdena lohit'ādīnāṃ grahaṇaṃ, asau samjñā-skandhaḥ, yadi paricched'ātmikā samjñā tat-samprayoge nimittaṃ udgrhñantīti paṃcāpi vijñāna-kāyā vikalpakāḥ syuḥ, na syuḥ, na hi paṃca-vijñāna-samprayoginī samjñā'paṭvī, mano-vijñāna-kāyā-samprayoginī tu paṭvīti tad eva vikalpakam uktam. (Wp,37, ll.5-10, Sp.39, ll.21-25)*

この個所の和訳に、荻原雲來譯註『稱友俱舍論疏(一)』昭和8年、p.61がある。参照されたい。ただし、ヤショーミトラ『明瞭義』では、想の有分別であることを否定しているのに対し、チャンキヤは有分別想を認めている。この点は筆者にはわからない。

- 27) bzhi bcu zhe dgu は数字であることは確かだが、正しい訳には自信がない。『藏漢大辞典』の zhe の項に、bzhi bcu zhe lnga 四十五、zhe dgu 四十九 (p.2399) とあるのを参考にして訳した。
- 28) lnga bcu nga gei の訳は、前注と同じく、『藏漢大辞典』の nga の項 lnga bcu nga lnga 五十五、lnga bcu nga dgu 五十九 (p.638) とあるのを参考に訳した。
- 29) 『俱舍論』では、心作用の数は、46 である。桜部健・上山春平『仏教の思想 2 存在の分析(アビダルマ)』昭和44年、pp.96-100 参照。チャンキヤの解説が何に基づいているのか筆者にははっきりしないが、後半の 51 という数は『入阿毘達磨論』*Abhidharmāvatāra* にあるという指摘がある。桜部・上山本 p.259。結局、チャンキヤは、心作用を 49 とするのであろう。なお、桜部氏は『入阿毘達磨論』をチベット語から訳している。桜部健「入阿毘達磨論の研究」『大谷大学研究年報』18,1966, pp.163-227 (注 II-6) の櫻部本 pp. 184 - 241 に改変して採録)。なお、中観派の巨匠、チャンドラキールティ (Candrakīrti) の『中観五蘊論』が『入阿毘達磨論』の影響を受けていることを指摘する研究もある(横山剛『『中観五蘊論』の思想的背景について:『五蘊論』ならびに『入阿毘達磨論』との関係についての再考』『真宗文化:真宗文化研究年報』25,2016, pp.23-42 を挙げておく。ここでは世親の『大乘五蘊論』との関りも考察されている)。中観派であるチャンキヤの解説が、『中観五蘊論』を意識したものかどうかは筆者の扱える範囲を超えている。また、『中観五蘊論』のチャンドラキールティ作、ツォンカバ (Tsong kha pa, 1357-1419) が疑問視していたことを示唆する論文もある(池田練太郎「Candrakīrti『五蘊論』における諸問題」『駒沢大学仏教学部論集』16,1985, p.571) ので、ツォンカバの伝統を継承するチャンキヤの動向は微妙である。これに対する見解は、横山剛『全訳 チャンドラキールティ 中観五蘊論』2021年、pp. 16-17にある。
- 30) 「この2つ」が何を指しているのか筆者には不明である。

ローマ字転写

gnyis pa phung khams skye mched kyi rnam bzhag la/phung khams skye mched  
gsum bstan pa'i dgos pa ni/mdzod las/**rmongs dbang 'dod rnams gsum gyi phyir/**  
ces pa ltar/rmongs pa gsums ldog pa dang dbang po rno 'bring rtul gsum rjes su 'dzin  
pa dang/tshig gi spros pa rgyas 'bring bsdus gsum 'dod pa rnam rjes su 'dzin pa'i ched  
du yin no//phyi ma gnyis go sla la/rmongs pa ldog tshul ni/sems byung la ril por  
'dzin pa'i rmongs pa ldog ched du phung po lnga dang/gzugs la ril por 'dzin pa'i  
rmongs pa ldog ched du skye mched bcu gnyis dang/gzugs sems gnyis ka la ril por  
'dzin pa ldog ched du khams bco brgyad bstan pa 'o//phung po lnga'i rim ni/ de nyid  
las/**rims ni rags dang kun nyon mongs//snod sogs don khams ji bzhin no//**ces pa  
ltar rags phra'i rim pa dang/kun nyon skye ba'i rim pa dang/zas la longs spyod pa'i  
rim pa dang/khams gsum na spyod tshul gyi rim pa dang mthun pa 'o//khams dang  
skye mched kyi rim pa ni/yul can gyi skye mched dang khams kyi rim pa nges  
shing/de dang mthun par yul gyi skye mched khams kyi rim pa bshad pa ste/zhib par  
ma spros so//sgra bshad ni/de nyid las/**spungs dang skye sgo rigs don//**ces pa ltar  
du ma gcig tu spungs pas na phung po/skye ba'i sgor gyur skye mched/chos de'i rigs  
yin pas na khams so//dbye ba la/phung po lnga las gzugs ni/mig/rna ba/sna/rce/  
lus kyi dbang po lnga dang/gzugs sgra dri ro reg bya ste don lnga dang/rnam par rig  
byed ma yin pa'i gzugs te bcu gcig go//de las gzugs kyi skye mched la kha dog gi  
gzugs bcu gnyis dang/dbyibs kyi gzugs brgyad de nyi shu 'o//kha dog ni sngo ser  
dkar dmar bzhi dang/sprin du brdul khug rna grib ma nyi ma snang ba mun pa rnams  
so//dbyibs ni/ring po/thung du/lham pa/zlum po/mtho ba/dma' ba/phya le ba/  
phya le ba ma yin pa rnams so//sgra'i skye mched la/zin pa'i 'byung pa chen po rgyur  
byas pa'i sgra dang/ma zin pa'i 'byung pa chen po rgyur byas pa'i sgra gnyis/de re re  
la yang sems can du ston pa dang mi ston pa gnyis re/de re re la yang snyan mi snyan  
gnyis re ste brgyad do//dri la zhim mi zhim re re la/mnyam mi mnyam gnyis re ste  
bzhi 'o//ro la mngar ba/skyur ba/kha ba/ska ba/tsha ba/lan tshva ba/vaba ste drug  
go//reg bya la/sa chu me rlung gi' byung ba bzhi dang/'jam/rtsub pa/lci ba/yang  
ba/grang ba/bskom ba ste bcu gcig go//rnam par rig byad ma yin pa'i gzugs la sdom  
pa dang sdom pa ma yin pa dang/bar ma'i gzugs te/gsum du yod cing/de nyid las/  
**gyengs dang sems med pa yi yang/**ces sogs ltar/gyengs pa dang/sems med pa'i gnas  
skabs su yang 'byung ba/dge mi dge gang rung yin pa/rgyun snga phyi gang rung

dang bcas pa/'byung ba chen po bzhi rgyur byas pa/rnam par rig byed ma yin pa ste khyad par lnga ldan du 'dod cing/rnam par rig byes ma yin pa'i gzugs la gzugs mtshan nyid par 'dod pa'i rang sde ni/bye smra dang thal 'gyur pa gnyis su nges so// tshor ba'i phung po la bde sdug btang snyoms kyi tshor ba gsum dang/mig gi 'dus te reg pa las byung ba'i tshor sogs drug tu yod kyang/bsdud na lus tshor sems tshor gnyis su 'du 'o//du shes kyi phung po la/mtshan ma tsam du 'dzin pa'i rtog med kyi 'du shes dang/bkra bar 'dzin pa'i rtog bcas kyi 'du shes gnyis so//du byed kyi phung po la/mtshungs ldan 'du byed dang/mtshungs ldan ma yin pa'i 'du byd gnyis so//dang po la/sems las byung ba bzhi bcu zhe dgu yod de/sems byung lnga bcu gcig las tshor 'du gnyis ma gtogs pa 'o//mtshungs ldan ma yin pa'i 'du byed la 'di'i lugs la bcu bzhi yod de 'di gnyis 'og tu 'chad par 'gyur ro//khams bcu brgyad la mig gi khams sogs rten gyi khams drug/mig gi rnam par shes pa sogs rten pa'i khams drug/gzugs sogs yul gyi khams drug ste bco brgyad do//skye mched ni/mig sogs yul can gyi skye mched drug dang/gzugs sogs yul gyi skye mched drug go// (64b/4-66a/2)

略号

P:P. Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, 1975, Patna, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII, second ed.

S:S. D. D. Śāstrī, *The Abhidharmakośa & bhāṣya of Acārya Vasubandhu with Sphutārthā Commentary of Ācārya Yaśomitrā*, 2008, Varanasi, Bauddha Bharati Series 5-6

E:Yasunori Ejima, *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu chapter I: Dhātunirdeśa*, 1989, Tokyo

W:U. Wogihara, *Sphutārthā Abhidharmakośavyākhyā the work of Yaśomitra*, 1989 rep. of 1936, Tokyo

なお、P の Pradhan 本は、底本として利用されることが多いけれど、その問題点も指摘されている。(江島恵教『『俱舎論』サンスクリット・テキスト校訂について』『仏教文化』22, 平成元年、特に pp.4-5)

令和4年 初夏 脱稿

〈キーワード〉 チャンキヤ、蘊界処、宗義書